

## 三宅義子さんの思い出

## 再び三宅義子さんと出会うために

藤井 郁子

去年の年明け頃から、三宅義子さんの容態はかなり悪くなったように思えた。酸素吸入器を一時も手放せない状態だった。元々細めの体型なのだが、日に日に痩せていくことが目に見えた。私の胸はキューと痛んだ。それなのに本人は悲観的でもなく「その時がきたら、はいさようならよ」と淡々としていた。

集団的自衛権の行使が閣議決定される5日前、最後の仕事になると覚悟していたのだろう『政治とジェンダーのあいだ』の発行日から6日後に、義子さんは逝かれた。なんて見事な死に様だろう。少なくとも私は泣き言を一度も聞いたことがない。中途半端な同情やお節介を煩わしいと嫌うタイプだった。だから突然の訃報を聞いた時は「三宅義子さんが死ぬ訳がない」となぜか確信を持ってしまった。「死んでも死ぬ訳がない」と言うべきだろうか。涙は出ない、何処かで生きているはずだから。今でもその感覚が続いている。義子さんはそんな類まれな人だった。『政治とジェンダーのあいだ』を読んで改めてそう思った。肉体の死は誰にも訪れる生命体の自然であるが、残された言葉は生命体に働きかける永遠の思想である。

「私はリブ世代よ」が口癖だった。70年代初頭にフェミニズムに魅了された女性たちは少数だったかもしれないが、フェミニズムが問いかけ揺さぶったのは、これまで世界に伝播されている思想や文明のすべてだった。「私はリブ世代よ」には、義子さん自身の歩みや思想がしっかりと込められていた。義子さんはフェミニズムの彼方に、新しい人間観や社会思想を想定していたのだと思う。

私が三宅義子さんの名前を最初に知ったのは1994年の朝日新聞山口版の紙面だった。折しも男女共同参画行政の盛り上がりを受け、山口県立大学国際文化学部教授に女性学を専門とする三宅義子さんが新任されたという記事だった。国策追随を旨とし良妻賢母の育成で知られていた女子専門学校を前身とする大学の変貌ぶりに戸惑いを覚えつつも、新任の女性学教授に興味を抱かずにはいられなかった。

「憲法を活かす市民の会・やまぐち」や「平和憲法ネットワーク・やまぐち」の活動を通して、義子さんと親しくなるのに時間はかからなかった。その頃私は平成の市町村合併で広域化した萩市の市議会議員をしていたのだが、無所属・無党派・地元組織なしの私は、合併後初の選挙で落選し鬱々としていた。「私の研究室にいらっしゃいよ」との義子さんの声は救いだった。貧しい母子家庭の母であるという私自身の深刻な事情も忘れ、翌年の4月、大学院に社会人入学してしまったのである。大学生の息子に仕送りをしなくてはならないのに、何て軽はずみな母であろうか。奨学金制度の不備に怒りつつ、貧困家庭に拍車がかかっても尚“学問”の世界を覗いてみたかったのである。

ジョン・スコット『ジェンダーと歴史学』、鹿野政直『現代日本女性史——フェミニズムを軸として』、上野千鶴子『生き延びるための思想』などをテキストにして、語り合える

時間はとても貴重だった。日常世界を俯瞰し知の世界に遊ぶことを 50 代の半ばで経験できたことは実に愉快的な経験だった。金欠の深刻化など些細なことに思えた。「個人的なことは政治的なことである」「The personal is political」は義子さんの原点だった。個人的なことや私的なことがどのように意味を持たされ、政治性を帯び支配・被支配の関係を構築していくかという視点である。

『政治とジェンダーのあいだ』を開き、1981 年に書かれた「家族の位置——フェミニズムとマルクス主義」から頁をめくると、義子さんが積み重ねてきた思考の足跡を旅しているような心地になる。フェミニズムを淵源とする思想を言葉にして形づくることの厳しさと探究の喜びが行間から滲みでてくるようだ。編集の仕事を途中で辞めて、カリフォルニア大学サンタクルーズ校大学院に留学された経歴が物語っているように、母語ではない言語で論文を書くことで身についたというべきか、文章の構成や言葉の使い方についてピリピリするような厳格さを持っておられた。義子さんには、私の不勉強や杜撰な構成はもとより凡庸さを含めほとんどのことが見透かされていた。三宅義子さんの文章は何度読んでも過不足なく完璧だった。

「もう一度沖縄に行きたいね」と療養中の義子さんがつぶやいた。私は「そうですね」と生返事をしてしまった。もう旅に出られる状態ではなかった。2008 年の夏、「基地と女性」のテーマを抱いて数人の仲間たちと沖縄を旅した思い出が蘇った。肌を刺すような透明な日射しが辺野古の海をより一層青く見せていた。辺野古新基地建設反対の座り込みに皆で参加した。「日本は植民地なのよ」とため息をついたのは義子さんだった。沖縄の女性たちが織った布に特別の思い入れがあり、「こうやって織るのよ」と手真似をしてみせた。思い出は尽きない。



沖縄・知花昌一さんの民宿にて（後列右端が三宅義子さん、左から 2 人目が筆者）



岩国にて（前列右側が三宅義子さん、左側が筆者）

逝かれる 2 か月前、「話があるんだけど」と突然義子さんから電話があった。次の日、三宅邸で聞いたのは「書籍・資料を引き継いでもらいたい」そして「女性学研究会を続けることと山口市に市民活動の拠点を創るよう」頼みたいという内容だった。前々から義子さんが描いていた構想だったと思う。義子さんは本気だった。「不動産を探そう、NPO を設立したほうがいいのかも」などと積極的だった。友人の力も借りて、実際に物件を見たりした。義子さんは、荒い息で苦しげに酸素吸入器を引きずりながら「この板じゃ本の重みに耐えられない」と床をなでていた。私は 1 年くらいかけてゆっくり考えればいいと高をくくっていた。

あの時、義子さんは最後の力を振り絞って必死に訴えていたのだ。私が聞いた構想は現世を生きる私たちへの遺志だったのだ。重い課題を投げかけて逝かれた義子さん、私は難しい宿題に頭を抱える小学生のように苦しい。貧しく弱い私たちだが、義子さんの最後の願いを聞かなかったことにはできない。再び義子さんと出会うためにも、「闘う女性学」の看板を掲げ社会を耕す鋤であり続けたいと願っている。義子さん、どうか温かい目で私たちを見守っていて下さい。

